

和歌山県における思春期体験学習の効果に関する 二つのアンケート結果の比較検討

研究協力者 青木 龍 哉
(和歌山県保健環境部健康対策課)
共同研究者 藤社恵美子 西弘子 富田容枝
米田博美 櫻山玲子
(和歌山県古座保健所)

はじめに

近年、わが国においては、産業形態、社会状況が大きく変化し、家庭においては、核家族化が進行し、また、少子化の進展と共に出生数も大きく減少している。その結果、母性、父性の形成に重要な時期である思春期にある青少年が、家庭や地域社会において実際に乳幼児に接触する機会が少なくなっている。そこで和歌山県では、昭和61年度に、思春期における健康教育の効果的な在り方を検討するため、地域保健担当者及び学校保健担当者からなる思春期母子保健研究会を設置し、和歌山県古座保健所管内の県立古座高校の学生を対象として、性行動及び知識等に関するアンケート調査を実施した。その結果、思春期母子保健の現状が、子どもたちの精神的、身体的発達の変化に十分対応できていない実情が浮き彫りにされた。そこで、昭和63年度から、性に関する知識の普及また、思春期における母性・父性の健全な育成を図ることを目的とした健康教育の手段として、古座保健所と古座高校が共同して実施する、思春期体験学習をスタートさせた。体験学習は、古座高校の3年生全員を対象とし、事前の学習会と、古座保健所で実施する4カ月健診への参加から構成されている。当日の実施内容については、図1に示した。

その後、平成2年度から5年度まで体験学習の効果判定するために、元高校生が集まりやすい成人式を利用したアンケート調査(二十歳のアンケート)を実施し、各種学会等においてその結果を報告してきた。さらに、平成6年度は、思春期体験学習の評価に関する研究の全国調査に参加し、昭和63年度から平成5年度までの古座高校の卒業生に対して、思春期体験学習の長期的効果についてのアンケート(長期的効果アンケート)を実施した。全国調査の総合的な評価については、広島大学班により別に報告があるので、当研究においては、和歌

山県が独自に行ってきた二十歳のアンケート調査の中の直近の2年間である平成4年度と平成5年度の集計結果と、本年度実施した長期的効果アンケートの和歌山県分の調査結果の比較を行うとともに、両アンケートの質問項目の妥当性、信頼性について検討を行った。

研究方法

1. 二十歳のアンケート調査

アンケート対象者は、平成4年度と平成5年度の2年間に新成人となった、古座高校出身者(体験学習経験者であり各表中では、体験者と表記した)と、その対照群として古座高校の学区とほぼ重なる串本町、古座町、古座川町出身者で古座高校以外の出身者(体験学習未経験者であり、各表中では、未体験者と表記した。)である。アンケート方法は、対象者に、成人式の2週間前に自記式のアンケート用紙を送付し、上記3町の各成人式会場にて回収した。また、成人式欠席者及び古座高校出身者で他町村の出身者には、郵送での回答を依頼した。対象者数は、平成4年度が480人(男性244人、女性236人)、平成5年度が439人(男性217人、女性222人)であった。質問内容は、体験学習の印象、結婚・育児に対する意識、性に関する意識の調査等であった。

2. 思春期体験学習の長期的効果評価のための研究

古座高校において思春期体験学習を実施した昭和63年度から平成5年度の卒業生1263名に対して、思春期体験学習の長期的効果評価のために作成した、自記式アンケートを個別郵送し(平成6年12月下旬)、本研究班の分析担当である広島大学にて回収した。対象者数は、昭和63年度卒業生210人(男性107人、女性103人)、平成元年度209人(男性109人、女性100人)、平成2年度218人(男性108人、女性110人)、平成3年度208人(男性94人、女性114人)、平成4年度209人(男性94人、女性115人)、平

表1. 赤ちゃんのイメージを2つ教えて下さい

	かわいい	温かい	柔らかい	赤ちゃんが欲しい	尊い生命だ	よく泣く	育児が大変	面倒	嫌い
体験者	144 (40.9)	23 (6.5)	52 (14.7)	34 (9.7)	37 (10.5)	8 (2.3)	44 (12.5)	4 (1.1)	0 (0.0)
未体験者	120 (42.4)	19 (6.7)	30 (10.6)	39 (13.8)	21 (7.4)	11 (3.9)	25 (8.8)	5 (1.8)	1 (0.0)

うるさい	何とも思わない	その他	合計	肯定的	否定的
3 (0.9)	2 (0.6)	1 (0.3)	352 (100.0)	290 (82.4)	61 (17.3)
6 (2.1)	2 (0.7)	4 (1.4)	283 (100.0)	229 (80.9)	50 (17.7)

*肯定的は「かわいい」から「尊い生命だ」までの合計
否定的は「よく泣く」から「なんとも思わない」までの合計

(二十歳のアンケート)

表2. 赤ちゃんについてどのようなイメージを持っていますか

よく泣く	弱々しい	かわいい	元気でひのび	たくましい	何とも思わない	その他	無回答	合計
9 (3.0)	15 (5.0)	222 (73.8)	27 (9.0)	9 (3.0)	7 (2.3)	11 (3.7)	1 (0.3)	301 (100.0)

(長期的効果アンケート)

表3. 体験学習の時の(赤ちゃんについての)印象はどのようなものでしたか (3つ以内で重複回答)

楽しかった	かわいかった	将来子どもが欲しくなった	抱くのがこわかった	世話が大変だ	いやになった	親になるのは大変	つまらなかった	その他	合計
98 (12.8)	198 (25.8)	144 (18.8)	82 (10.7)	107 (14.0)	0 (0.0)	130 (16.9)	2 (0.3)	6 (0.8)	767 (100.0)

(長期的効果アンケート)

成5年度(男性99人、女性110人)の総数1263人(男性611人、女性652人)であった。質問内容は、結婚・赤ちゃん・育児に対するイメージ調査等であった。

研究結果

今年度実施した思春期体験学習の長期的効果評価のためのアンケートは、和歌山県の他、官崎、広島、高知、北海道で実施されたが、これらの総合的検討については、他の研究で実施されるので、本研究では、過去に和歌山県独自で実施した二十歳のアンケートとの比較検討を実施した。

各アンケートの回収数は、二十歳のアンケート335人(平成4年度分186人、平成5年度分149人)、長期的効果アンケート301人であった。

また、二十歳のアンケート調査については、思春期体験学習体験者(古座高校出身者)と未体験者(古座高校以外の出身者)に分けて分析を実施した。

両アンケートの比較検討に当たっては、質問項目が、必ずしも一致しておらず、全ての項目に渡っての分析は困難であったため、比較的質問内容が類似していた、(1)赤ちゃんについてのイメージ調査、(2)将来の出生、子育てについての調査、(3)親になることについての調査、(4)人工妊娠中絶についての調査の4つの分野に関連する質問につ

いてのみの分析を行った。

1. 赤ちゃんについてのイメージ調査(表1、表2、表3)

表1に二十歳のアンケートによる赤ちゃんについてのイメージ調査の結果を、体験学習の体験者、未体験者の別にまとめた。全項目は、内容に応じて、赤ちゃんに対して肯定的なイメージと否定的なイメージにわけて、最も頻度の高かった項目は、体験者、未体験者ともに「かわいい」であり共に40%強であった。以下10%を超えた項目は、体験者については、「柔らかい」、「育児が大変」、「尊い生命だ」、未体験者については、「赤ちゃんが欲しい」、「柔らかい」であった。表2に長期的効果アンケートによる赤ちゃんのイメージ調査の結果をまとめたが、「かわいい」がやはり第1位であった。二つのアンケート結果の比較については、質問項目が異なり単純な比較が出来ないため、全項目を赤ちゃんに対して肯定的な答えと否定的な答えに分けて比較を行った。二十歳のアンケートにおける体験者では、肯定的な答え(「かわいい」から「尊い生命だ」まで)82.4%、否定的な答えことなり(「よく泣く」から「何とも思わない」まで)17.3%、未体験者では、肯定的な答え80.9%、否定的な答え17.7%であり、ほぼ同様の結果が得られた。又、長期的効果アンケートでは、肯定的な答え(「かわいい」から「たくましい」まで)85.7%、否定的な答え(「よく

泣く]、「弱々しい」、「何とも思わない」)10.3%であった。

表3に長期的効果アンケートにおける、体験学習時の赤ちゃんの印象をまとめた。やはり、第1位は、「かわかった」であったが、以下「将来子どもが欲しくなった」、「親になるのは大変」、「世が大変だ」の順であった。肯定的な答え(「楽しかった」から「将来子どもが欲しくなった」まで)が57.4%、否定的な答え(「抱くのがこわかった」から「つまらなかった」まで)が41.9%であった。表1、表2の結果に比して、一見否定的な答えの割合が多いようであるが、これは、体験学習時、生身の赤ちゃんに接して、単にかわいいだけの存在から、育児の大変さ、責任の重さに気づいたことによる正直な感想であろう。

2. 将来の出生、子育てについての調査(表4、表5、表6、表7、表8)

表4に、将来の子どもの希望調査の結果を示したが、希望する子どもの数は、体験者、未体験者共

に2人が最も多くそれぞれ59.2%と57.0%、次に3人がそれぞれ25.5%と25.2%であった。子どもがいないと答えた者は、体験者で1.6%、未体験者で5.3%であった。また、表6に示した長期的効果アンケートでは、「あまり欲しくない」又は「欲しくない」と答えた者は、5.2%であった。これらの結果は、平成4年の第10回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)の結果とほぼ同様の傾向を示した。

表5に、表4と答えた理由を示したが、肯定的理由(「子どもが好き」、「兄弟ある方がいい」としては、体験者、未体験者ともに「兄弟がある方がいい」、否定的理由(「大変だから」から「子どもが嫌い」まで)としては、「大変だから」が最も多かった。表7、表8に表6と答えた理由を示しが、肯定的理由としては「子どもが好き」、否定的理由としては「育児が大変そう」が第1位であった。二十歳のアンケートの結果である表5の肯定的理由と長期的効果アンケートの結果である表7を比較することは、質問項目が大きく異なるため困難であった。質問項目が

表4. あなたは将来何人子どもが欲しいと思いますか

	1人	2人	3人	4人	5人以上	いない	その他	無回答	合計
体験者	9 (4.9)	109 (59.2)	47 (25.5)	4 (2.2)	4 (2.2)	3 (1.6)	4 (2.2)	4 (2.2)	184 (100.0)
未体験者	5 (3.3)	86 (57.0)	38 (25.2)	3 (2.0)	7 (4.6)	8 (5.3)	2 (1.3)	2 (1.3)	151 (100.0)

(二十歳のアンケート)

表5. それはどうしてですか

	子どもが好き	兄弟ある方がいい	大変だから	お金がかかる	子どもが嫌い	その他	合計
体験者	35 (19.2)	130 (71.4)	5 (2.7)	4 (2.2)	2 (1.1)	6 (3.3)	182 (100.0)
未体験者	48 (30.8)	88 (56.4)	10 (6.4)	2 (1.3)	5 (3.2)	3 (1.9)	156 (100.0)

(二十歳のアンケート)

表6. 将来子どもが欲しいか (子どものいない者のみ)

ぜひ欲しい	できれば欲しい	どうでもよい	あまり欲しくない	欲しくない	考えたことがない	無回答	誤回答	合計
186 (65.0)	66 (23.1)	11 (3.8)	8 (2.8)	7 (2.4)	6 (2.1)	0 (0.0)	2 (0.7)	286 (100.0)

(長期的効果アンケート)

表7. 子どもが欲しい理由は何ですか (3つ以内で重複回答)

子どもが好き	自分の命を伝えた	育児が楽しそう	育児をしてみたい	子どもが居てこそ夫婦家族	人間としてあたりまえ	親になつて一人前	配偶者の希望	その他	合計
163 (29.2)	87 (15.6)	47 (8.4)	54 (9.7)	102 (18.3)	50 (9.0)	39 (7.0)	5 (0.9)	11 (2.0)	558 (100.0)

*表6で「ぜひ欲しい」、「できれば欲しい」と答えた者のみ回答 (長期的効果アンケート)

表8. 子どもが欲しくない理由は何ですか (3つ以内で重複回答)

好きでない	関心がない	育児が大変そう	育児に向いていない	仕事が育児で妨げられる	時間や金がかかる	その他	合計
4 (11.8)	2 (5.9)	9 (26.5)	5 (14.7)	3 (8.8)	7 (20.6)	4 (11.8)	39 (100.0)

*表6で「余り欲しくない」、「欲しくない」と答えた者のみ回答 (長期的効果アンケート)

表9. どんな親になりたいですか、2つ選んで下さい

	責任感強い	やさしさ 思いやり	明るさ ユーモア	厳しさ	経済力	暖かい雰 囲気	子供と一 緒に遊ぶ	親になり たくない	その他	合計
体験者	48 (14.8)	74 (22.8)	55 (17.0)	15 (4.6)	5 (1.5)	63 (19.4)	58 (17.9)	2 (0.6)	4 (1.2)	324 (100)
未体験者	39 (14.8)	58 (22.1)	34 (12.9)	14 (5.3)	6 (2.3)	45 (17.1)	60 (22.8)	4 (1.5)	3 (1.1)	263 (100)

(二十歳のアンケート)

表10. 一般的な意味で「親」についてどう思いますか

うるさく 煩わしい	注文が多 い	有難い	楽しい	分からな い	その他	無回答	合計
27 (9.0)	18 (6.0)	199 (66.1)	9 (3.0)	26 (8.6)	19 (6.3)	3 (1.0)	301 (100.0)

(長期的効果アンケート)

表11. 実際に親になった印象はいかがですか (3つ以内で重複回答)

楽しい	毎日が充 実している	育児を通 じて自分 も成長	心身とも に疲れる	育児がつ らいこと がある	しつけ教 育に迷方 にくれる	後悔する ことがある	合計
6 (22.2)	4 (14.8)	9 (33.3)	4 (14.8)	2 (7.4)	0 (0.0)	2 (7.4)	27 (100.0)

(長期的効果アンケート)

比較的類似していた、表5の否定的理由と表8を比較すると、第1位が、共に「大変だから」であった。第2位は、表5の体験者と表8では「金がかかる」であったが、表5の未体験者では、「子どもが嫌い」であった。

3. 親になることについての調査(表9、表10、表11)

表9に二十歳のアンケートにおける、なりたい親のイメージ調査の結果を示した。体験者、未体験者ともに「やさしさ・思いやり」、「暖かい雰囲気」、「子どもと一緒に遊ぶ」が上位の3項目であり、それぞれ20%前後を占めていた。一方で、「厳しい」は両者ともに5%程度にとどまっていた。

次に、表10に子どもとして、自身の親に対するイメージ調査の結果では、「有り難い」が第1位を占めている一方で、「うるさく煩わしい」、「注文が多い」といった否定的な答えも、それぞれ、第2位、第4位を占めていた。

また、自身が実際に親になった印象について表

11に示したが、「育児を通して自分も成長」が第1位であった。項目を肯定的印象と否定的印象に分けると、肯定的印象(「育児を通して自分も成長」、「毎日が充実している」、「楽しい」)が70.3%、否定的印象(「心身ともに疲れる」、「育児が辛いことがある」、「後悔することがある」)が29.7%であった。

4. 人工妊娠中絶についての意識調査(表12、表13)

表12に二十歳のアンケート調査による人工妊娠中絶についての調査結果を示した。まず、「よくないこと」と「仕方がない」を比較すると、「よくないこと」と答えた者が、「仕方がない」と答えた者を大きく上回っていたが、その比は、体験者で3.1倍、未体験者で1.9倍であった。その具体的な理由としては、体験者では、「心が傷つく」、「胎児がかわいそう」の1慣であったが、未体験者では、「胎児がかわいそう」、「心が傷つく」と逆転していた。

表13に、長期的効果アンケートによる人工妊娠

表12. 人工妊娠中絶についてどう思いますか、2つ選んで下さい

	よくない こと	仕方がな い	母体が傷 つく	心が傷つ く	胎児がかわ いそう	女性がか わいそう	わからな い	その他	合計
体験者	76 (23.6)	24 (7.5)	43 (13.3)	78 (24.2)	66 (20.5)	27 (8.4)	4 (1.2)	4 (1.2)	322 (100.0)
未体験者	42 (16.7)	22 (8.8)	46 (18.3)	46 (18.3)	63 (25.1)	18 (7.2)	8 (3.2)	6 (2.4)	251 (100.0)

(二十歳のアンケート)

表13. 人工妊娠中絶についてどの様に考えていますか

絶対にす べきでない	出来るだ けしない 方がよい	やむを得 ないとき はよい	しても構 わない	わから ない	合計
40 (13.3)	174 (57.8)	71 (23.6)	9 (3.0)	7 (2.3)	301 (100.0)

(長期的効果アンケート)

申絶についての調査結果を示した。ここでもやはり人工妊娠中絶について否定的な回答をした者(「絶対にすべきでない」「出来るだけしない方がよい」)が71.1%と、肯定的な回答をした者(「やむを得ないときはよい」、「しても構わない」)26.6%を大きく上回り、その比は、2.7倍と表12における体験者の比に近かった。

考 察

本研究では、和歌山県が高校在校時の思春期体験学習の効果を調べるため独自に実施した二十歳のアンケート調査の平成4年度分と平成5年度分の結果と、平成6年度に思春期体験学習の評価に関する全国調査の研究班の一員として実施した、長期的効果に関するアンケート調査との比較検討を行った。二十歳のアンケートの対象者は、昭和63年度から思春期体験学習を実施してきた古座高校の卒業生とその対照群として選ばれた串本町、古座町、古座川町出身で古座高校以外の卒業生であった。両者は、各表中「経験者」、「未経験者」と分類されている。一方、長期的効果に関するアンケートの対象者は、古座高校の卒業生であり、ほとんどの者は、高校において思春期体験学習を実施している。このため、同地域のほぼ同世代の者を対象として実施された2つのアンケートの集計結果は近似し、さらに同じ古座高校出身者である、長期的効果に関するアンケートの集計結果と、二十歳のアンケートの経験者群の結果は似た傾向を示すことが予想される。そして、数年間の間において実施された質問結果の再現性が認められれば、質問項目の有効性が確認されることになる。今回は全ての項目中で比較的類似している4つの分野の質問項目のみの比較検討を行った。その結果、(1)赤ちゃんについてのイメージ調査の中で、二つのアンケートともに「かわいい」が第1位であったこと、各質問項目を、肯定的な答えと否定的な答えに分類して行った分析では、ほぼ、同様の結果を示し

たこと(表1と表2)、(2)将来の出生、子育てについての調査の中で、将来の子どもの希望についての二つのアンケートの結果が、共に、第10回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)と類似していたこと、子どもが欲しくない理由として二十歳のアンケート調査の体験者の結果が長期的効果アンケートの結果と近かったこと、(4)人工妊娠申絶についての調査で、二つのアンケートともに否定的な答えが肯定的な答えを大きく上回り、その比は、体験学習経験者である、二十歳のアンケートにおける体験者群と長期効果アンケートの対象者がほぼ3倍であり、一方体験学習を経験していない二十歳のアンケートにおける未体験者ではほぼ2倍であったこと等、二つのアンケート結果の類似点が認められた。しかしながら、二つのアンケートの質問項目が大きく異なっているため、今回の分析結果のみで、各質問項目の再現性や妥当性等について確認することは困難と考えられた。今後は、平成6年度におこなわれた長期的効果アンケートの全国集計の詳細な分析結果の報告を待って、検討を深めていきたい。

まとめ

本研究では、和歌山県が過去に、高校在校時の思春期体験学習の効果を調べるため独自に実施した二十歳のアンケート調査結果と、思春期体験学習の評価に関する全国調査の研究班の一員として実施した、長期的効果に関するアンケート調査との比較を行い両アンケートの再現性、信頼性について検討した。その結果、赤ちゃんについてのイメージ調査等で両アンケート結果の類似性が見いだされたが、今回の分析結果のみで、各質問項目の妥当性等について判断することは困難と考えられた。今後は、平成6年度におこなわれた長期的効果アンケートの全国集計の詳細な分析結果の報告を待って、検討を深めていきたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

近年、わが国においては、産業形態、社会状況が大きく変化し、家庭においては、核家族化が進行し、また、少子化の進展と共に出生数も大きく減少している。その結果、母性、父性の形成に重要な時期である思春期にある青少年が、家庭や地域社会において実際に乳幼児に接触する機会が少なくなっている。そこで和歌山県では、昭和 61 年度に、思春期における健康教育の効果的な在り方を検討するため、地域保健担当者及び学校保健担当者からなる思春期母子保健研究会を設置し、和歌山県古座保健所管内の県立古座高校の学生を対象として、性行動及び知識等に関するアンケート調査を実施した。その結果、思春期母子保健の現状が、子どもたちの精神的、身体的発達の変化に十分対応できていない実情が浮き彫りにされた。そこで、昭和 63 年度から、性に関する知識の普及また、思春期における母性・父性の健全な育成を図ることを目的とした健康教育の手段として、古座保健所と古座高校が共同して実施する、思春期体験学習をスタートさせた。体験学習は、古座高校の3年生全員を対象とし、事前の学習会と、古座保健所で実施する4ヵ月健診への参加から構成されている。当日の実施内容については、図1に示した。

その後、平成2年度から5年度まで体験学習の効果を判定するために、元高校生が集まりやすい成人式を利用したアンケート調査(二十歳のアンケート)を実施し、各種学会等においてその結果を報告してきた。さらに、平成6年度は、思春期体験学習の評価に関する研究の全国調査に参加し、昭和63年度から平成5年度までの古座高校の卒業生に対して、思春期体験学習の長期的効果についてのアンケート(長期的効果アンケート)を実施した。全国調査の総合的な評価については、広島大学班により別に報告があるので、当研究においては、和歌山県が独自に行ってきた二十歳のアンケート調査の中の直近の2年間である平成4年度と平成5年度の集計結果と、本年度実施した長期的効果アンケートの和歌山県分の調査結果の比較を行うとともに、両アンケートの質問項目の妥当性、信頼性について検討を行った。